

# 過疎地域における工業教育の実践について

北海道名寄産業高等学校 建築システム科教諭 和田 博之

## 1 はじめに

昭和42年名寄高等学校に「建築科」が新設され、昭和50年創立された「名寄工業高等学校」に「建築科」が設置された。平成21年、名寄恵凌高校と統合し、工業科に加え普通科と家庭科併置の高校として「名寄光凌高等学校」となり「建築システム科」に学科転換した。平成12年名寄農業高校と統合し「名寄産業高等学校建築システム科」として現在に至る。

統合と新設を進めながら、現在は工業科（建築システム科、電子機械科）農業科（酪農科学科）、家庭科（生活文化科）の4間口大学科集合型の専門高校である。また約4km以上離れている二つのキャンパスを農業科の生徒がバス移動し、さらに「寄宿舎」を有する北海道内唯一の特徴的な専門高校である。

本校が所在する名寄市は、北海道北部に位置し、1年の気温の寒暖差が60℃を超える。多雪地域で厳しい自然環境にある2.8万人の地方都市にも人口減少による過疎化が進み、多くの職種の後継者不足が深刻な課題となっている。

## 2 建築に進まない生徒、滞る求人票

平成18年、定員割れの本学科への入学目的は「卒業、できれば就職」であった。建築に興味を持っている生徒は数名で、成績平均は校内最低、生徒指導事故も多く、周囲からも特別視される厳しい環境であった。身だしなみや見学、受講態度が指摘され現場見学会も中止になり、教員は生徒を表に出すことに難色を示していた。卒業生の早期離職が目立ち、かつて採用してくれた地元企業からの求人票が途絶えていた。社会情勢も建設業を3Kの代表のように取り上げられ、建設業の志望者もほとんどいなくなっていた。

## 3 建築「を」教える→建築「で」教えたい

「名寄駅を褒める授業」を行った。戦中戦後から変わらない牧場型の現存する駅舎が年寄や遠く離れていた帰郷者からとても評価されていること、ふるさと名寄の顔としての素敵さを伝えた。生徒の目が少し真剣になった。無目的だった生徒達に、身近な地域に関心を寄せながら、建築の意義や役割を伝え興味を持たせる目的である。生徒の意識を変える授業に取り組んだ。

## 4 表に出して我が身を正す

3年生に「建築現場見学会を成功させて、『社員に採用したい』企業を増やそう。」と呼びかけ、見学のための練習をした。「名寄市立天文台新築工事見学会」では、猛暑の中ヘルメットをずらしたり、腕まくりひとつしなないで、整然と見学した生徒達が、建築現場の企業から高く評価された。次の日自分たちの現場見学の様子が大きく地元新聞に取り上げられた。周囲から褒められ、生徒は少しずつ変わり始めた。

## 5 まちづくりを提案する生徒

2005年課題研究発表会より毎年必ず「自分たちのまちづくり」を発表している。北海道建築士会名寄支部をはじめ市民からも高く評価され、名寄市長も来校した。

設計事務所経験のある教員が設計コンペに応募させた。日本建築学会北海道支部主催の卒業設計優秀作品では金賞をはじめ、その後も上位入賞を果たした。さらに道都大学（現星槎道都大学）、九州産業大学、日本大学、日本工業大学のコンペや建築甲子園入賞などが地元新聞に報道され生徒達が次々と喜びに包まれた。

作品や模型は名寄市役所やイオン名寄店に常設展示され、市民から温かい言葉をたくさんいただいた。

産業高校になり建築システム科の生徒の印象が大きく変わり、その変化が名寄市民に伝わり始めた。

## 6 技能士を目指す生徒

生徒は設計に進む生徒だけではない。他の進路希望の者もいる。技術職に就きたい生徒もいれば技能士になりたい生徒もいる。

高校生ものづくりコンテスト全国大会北海道地区予選会（木工部門）に注目した教員がいた。職業能力開発協会から派遣された実技講師「建築大工マイスター」の指導が生徒の魂に火をつけた。その年度から希望者全員が建築大工技能士3級、さらに2級も3名合格している。

指導してくれているマイスターからは「なよろっ子のひたむきさがいい」と評価された。全国大会に1名、若年者ものづくり競技大会に2名が参加し、技能士を目指す生徒が増え始めた。成果は

報道や説明会で中学校に広まり、次々と大工志望者が集まり始めた。

## 7 産官学連携と信頼される学校づくり

産業高校への統合を契機に新しい学校イメージ「地域から信頼される学校づくり」を全面に出した。新設校の多忙な2009年、敢えて北海道教育委員会主催「専門高校 PowerUp プロジェクト推進事業『専門力UPプロジェクト』研究指定」を3年間受けた。

「地域コーディネート委員会」では、本校生徒への教育活動に地元企業や行政がどのように関わることができるか毎年話し合い、産官学連携と学科間連携など各学科共に成果をあげた。「なよろアスパラまつり」、「なよろ産業まつり」、「星守る犬」映画イベント、製作物寄贈など地域行事参加に各学科はそれに応え、生徒の活躍は常に報道された。

続く2012年、同じく北海道教育委員会主催「専門高校スキルアッププロジェクト推進事業『パイオニアトレーニング』研究指定」では現状の専門力をさらに高めるため地元の関連企業や行政と関わり、より具体的なイベントやものづくりを通じた教育活動の体制を構築できた。

学科の特徴を活かし、専門性を高め合う生徒の頑張りに地元市民や民間企業、行政が応援してくれた。

産官学がそれぞれの役割を発揮して、まちづくり、ものづくり教育を支えてくれた。まちづくり（都市計画）とものづくり（木工品製作）を通して、建築システム科生徒は地域に貢献する本当にいい顔になった。

## 8 個々の生徒に合った進路を拓く

経済的な理由で大学進学をあきらめた生徒が増えた。頑張る生徒に道をつけたい。

2014年道都大学（現星槎道都大学）と高大連携を行った。互いの連携授業を通して、生徒は大学を体験できる。大学は入学する前から生徒の取り組みを見ることができる。大学志望の生徒は、行きたい大学の学費免除実現のために、コンペ入賞や設計作品発表など精力的にこなした。現在までに全学費免除3名をはじめ一部学費免除生徒も多数となった。大学進学を希望する生徒が増えた。

現在、入学者は建築志望の生徒ばかりになった。早期に現場見学会を実施し、技術職と技能職の各職種を説明し、生徒自身の興味、関心、意欲、自信を引き出す。2学年での進路先決定まで一人ひとり丁寧に進める。

1、2学年対象技能講習会（大工、左官、塗装、鉄筋、鳶）で職人からの直接指導を体験すると技能士志望者が増えた。賃金など雇用形態の違いを説明し、長期休業を使って就業体験をする。生徒と保護者の反応を見て先を進める。この取り組みが広まり、今では数多くの地元企業が協力してくれている。

生徒の個々の性格、人間性、特徴、成績に応じられる隙間のない進路先の実現を目標に、設計士志望から技術者、さらに技能士まで及んだ。

## 9 地元産業の要望に応える

企業の存続にかかわる後継者不足問題が深刻である。若い時期から長年にわたり就労できる高校生はとても期待されるが、早期離職の課題もあり、社員となった卒業生は実に大切に扱っていただいている。入社後の動向にも目を向ける。

高大連携事業では、大学卒業後も地元志向の生徒は可能な限り地元就職を進めており、道北の技術者不足を補う取組みに協力していただいております。旭川市の設計事務所やゼネコンに就いている。

建設業の不人気職種もどのように就職に結びつけるかも、今後の課題である。

毎年2月、1、2学年を対象に、本校の教室に企業を招いて、自社のPRをしていただいている。生徒が企業を見、企業が生徒を見る。後継者不足に悩む企業が、生徒に期待する温かい言葉の投げかけに生徒は応えようとする。仕事に就ける準備と自信をつけさせるために、今日も実習をやり、製図を書いてスキルを上げてあげる。できたことを喜ぶ生徒の一人ひとりの笑顔に、正しい教育のあり方を感じるのである。

## 10 おわりに

生徒を最も理解している教員が、積極的に企業を理解しマッチングを図ることや、不人気職種の進路にも光をあて、志望する生徒を育てていくことは、専門学科だからこそできる大切な使命である。過疎地域だからこそ、企業と生徒の確実な橋渡しが必要である。

進路を決めるのは生徒だが、一方で地域に必要とされる業種の存続に、教師が積極的にかかわることも重要である。

今も「まちづくり」を熱心に考える生徒達の活躍は、同時に我々の「建築『で』教える教育」の形である。なれば我々専門高校教員にこそ、より一層「地域づくり」の意識が必要なのである。